一三四八二
一三四八三
一三四八四
一三四八五
*一三四八六
*一三四八七−八八
*一三四八九
*一三四九〇−九一
*一三四九二
一三四九三−九四
一三四九五
一三四九六
一三四九七
一三四九八−九九
一三五〇〇
一三五〇一
一三五〇二
*一三五〇三
*一三五〇四

小物

夫れ轉中の萬物は、日影を以て天地と爲す、
持中の萬物は、水燥を以て天地と爲す、
轉中に居るを以て、天物は常に動く、
持中に居るを以て、地物は常に止る、是の故に。
日月は水火を天に於て爲す、迸りて散ずる者は、易にして星漢なり、
会にして月辰なり、
水燥は天地を地に於て爲す、分れて散ずる者は、上にして雲雨なり、
下にして動植なり、
蓋し天物なる者は、箇箇圓成なり、易象は影に居りて光を發す、
会象は景に居りて光を受く、
易象なる者は星漢にして、東運は至って微なり、轉と伴うが如し、
会象なる者は辰沫にして、東運は甚だ速きなり、遲速留退す、
地物なる者は、箇箇異形なり、易質なる者は大に在りて清を爲す、
会質なる者は地に在りて濁を爲す、
易質なる者は雲雨なり、升降最も著るし、横旋は客氣なり、
会質なる者は動植なり、横竪最も著るし、升降は客氣なり、
蓋し天なる者は、杳渺にして測驗に闕くる有り、
地なる者は、撫摩にして交接に熟する有り、故に明を發して東行に勝る、
暗を含んで運行に勝る、
清を以て竪動を爲す、
濁を以て横動を爲す、

(PB 155)

一三五〇五　其の説や。天を略し地を悉す。蓋し
*一三五〇六−〇七　大は轉持覆載有り、此れも亦た風恬水陸有り、
一三五〇八　風恬水陸は天地を開く、而して
一三五〇九　雲雷雨雪は象質を爲す、
一三五一〇　絪縕摩盪して。物は其の間に化す。
一三五一一　物の其の間に化する。其の體を毎換し。
*一三五一二　成敗を以て鮮腐を爲す。蓋し
一三五一三　小なる者は居りて資る、
一三五一四　大なる者は容れて給す、是に於て
*一三五一五　轉は則ち理を規矩に於て成す、
*一三五一六　持は則ち理を横竪に於て成す、
*一三五一七　此に理を資るを以て。而して恬は立ちて風は旋る、
一三五一八　山は峙して海は俯す、
*一三五一九（復元）　是の故に物の其の間に成るや。横竪大小。變化は盡きず。
*一三五二〇（復元）　神爲の妙と雖も。亦た資給の中に居る。
*一三五二一（復元）　是を以て。風恬水陸の間。上は雲雨有り、
*一三五二二（復元）　下は動植有り、
*一三五二三（復元）　動は偏に神を專らにす、
*一三五二四（復元）　植は偏に本を專らにす、故に

(PB 156)

一三五二五（復元）動は則ち質を以て動す、神を以て營す、故に其の體は則ち温かし、其の神は則ち意を爲す、
一三五二六（復元）植は則ち質を以て止る、本を以て運す、故に其の體は則ち冷たし、其の神は則ち意を没す、
一三五二七（復元）動は則ち内を虚にして天中に横行す、
一三五二八（復元）植は則ち内を實して　地中に竪立す、
一三五二九（復元）生に動植有り。類を堅輭に剖く、
一三五三〇（復元）　處を水燥に分つ　故に植は則ち堅植輭植なり、
一三五三一（復元）　動は則ち堅動輭動なり、而して
一三五三二（復元）水陸相い有れば。則ち其の數は相い乘す。
一三五三三（復元）堅植は則ち土石なり、土は鹵を發し　石は金を収む、
一三五三四1復元　堅動は則ち介甲なり、甲は龜蟹を分ち　介は螺蛤を分つ、
一三五三四2復元　輭植は、則ち陸にして艸木なり、
一三五三四3復元　水にして藻樹なり、
一三五三四4復元　輭動は、則ち陸にして鳥獸なり、
一三五三四5復元　水にして魚龍なり、
一三五三四6復元　輭は則ち氣に勝る、
一三五三四7復元　堅は則ち質に勝る、
一三五三四8復元　大物は、氣を外にして質を内にす、故に
一三五三四9復元　内は土石を以て固し、外は運轉を以て保す、
一三五三四10復　小物は、質を外にして氣を内にす、故に

*三五三四１１復　外は皮肉を以て固し、内は營衛を以て保す、
*三五三四１２復　土氣は表に解く、故に氣物は發生に饒かなり、
*三五三四１３復　石質は下に結ぶ、故に質物は收凝に成るなり、
*三五三四１４復　天物は景影に居る、
*三五三四１５復　地物は水燥に居る、
*三五三四１６復　動植の生、
*三五三四１７復　堅輭の類、
*三五三四１８復　水燥は相い隔つと雖も。亦た各有り。
*三五三四１９復　各有ると雖も。富乏無きこと能わざるなり。
*三五三四２０復　動植は各堅輭有り、而して又た水燥有り、是を以て。
*三五三四２１復　輭生は、水陸各富む、
*三五三四２２復　剛生は、水陸偏りて富む、
*三五三四２３復　水陸の動植は各二つなり。鳥獸なり、魚龍なり、
*三五三四２４復　艸木なり、藻樹なり、
*三五三四２５復　堅動は二つなり、螺蛤なり、龜蟹なり、水に富む、
*三五三四２６復　堅植は二つなり、土鹵なり、金石なり、陸に富む、
*三五三四２７復　蓋し天地轉持の體は。虚實剛柔を爲す。
*三五三四２８復　風恬水燥の形は。以て横竪俯立を爲す。
*三五三四２９復　水なる者は横質なり、氣は下に鬱して、而して水は上に和す、

(PB 157)

一三五三四三〇復　山なる者は堅質なり、　燥は下に煦して、　而して氣は上に達す、
一三五三四三一復　氣は下に鬱す、　故に其の植は鮮少なり、　水は上に和す、
一三五三四三二復　故に其の動は蕃滋なり、　燥は下に和す、
一三五三四三三復　故に其の植は衆多なり、　氣は上に達す、
一三五三四三四復　故に其の動は鮮少なり、　是の故に。
一三五三四三五復　動は水に多し、　而して燥に少し、
一三五三四三六復　植は燥に多し、　而して水に少し、
一三五三四三七復　水物は吐納を以て息を爲す、
一三五三四三八復　陸物は噓噏を以て息を爲す、
一三五三五　鳥獸艸木は、　竪中に在りて而して其の體は立つ、
一三五三六　魚龍藻樹は、　横中に在りて而して其の體は俯す、　然り而して
一三五三七　動行は迂曲なり、
一三五三八　竪立は邪長なり、
一三五三九　動なれば則ち其の體は横俯す、
一三五四〇　植なれば則ち其の體は竪立す、　而して
一三五四一　其の中も又た各おの俯立して相い偶す。
一三五四二　細かに其の錯綜する所を觀れば。則ち
一三五四三　水動の伏は、　伏して潛むと雖も、　而も寢る無し、　時有りて跳躍す、
一三五四四　燥動の立は、　立ちて行くと雖も、　而も寢る有り、　時有りて坐す、

(PB 158)

一三五四五　鳥は横に翔びて竪に寐る、
一三五四六　獣は竪に行きて横に寢る、　且つ
一三五四七*　鳥は天氣に資ること多し　故に羽輕くして飛ぶ、　飲むこと少くして尿せず、
一三五四八　獣は地氣に資ること多し　故に質重くして走る、　飲むこと多くして尿す、
一三五四九　魚は虚氣を受くること多し、　水に因りて息を爲す、
一三五五〇　龜は實氣を受くること多し、　氣を閉じて潛む、
一三五五一*（復元）　動植は地を發して天に居す、
一三五五二*（復元）　土石は氣を結んで地に凝す、　故に動植は　虚質なり、
一三五五三*（復元）　土石は、　實質なり、
一三五五四*（復元）　天なる者は虚動なり、　故に物を没す、
一三五五五*（復元）　地なる者は實靜なり、　故に物を露す、
一三五五六*（復元）　物を没するの故に、　之を虚と謂う、
一三五五七*（復元）　物を露するの故に、　之を實と謂う、　故に
一三五五八*（復元）　地體なる者は實露なり。以て土石を爲す。石は地に於る骨なり、
一三五五九*（復元）　土は地に於る肉なり、
一三五六〇*（復元）　土石は則ち實止の體なり。虚動と。對して天地を爲す者なり。
一三五六一*（復元）　而して土石と謂うは。以て動植の中に。堅輭の一種を爲す者なり。
一三五六二*（復元）　何ぞや。土石は固に地體の堅輭なり。
一三五六三*（復元）　然れども持中は。虚質を地表に聚む、

一*三五六四（復元）
一*三五六五（復元）
一*三五六六（復元）
一*三五六七（復元）
一*三五六八（復元）
一*三五六九（復元）
一*三五七〇（復元）
一*三五七一（復元）
一*三五七二（復元）
一*三五七三（復元）
一*三五七四（復元）
一*三五七五（復元）
一*三五七六（復元）
一*三五七七（復元）
一*三五七八（復元）
一*三五七九（復元）
一*三五八〇（復元）
一*三五八一（復元）
一*三五八二（復元）

實質を地中に結ぶ

地體の土石を爲すや。生化は跡を没し。虚動の攸遠を爲すと伍するなり。故に其の物は精華を發し。而して地面に凝結し。以て解結の跡を爲す。彼の生化の跡を没する者と異なるなり。解結は已に跡を爲す。生物に非ずして何ぞ。此の故に。土は鹵を發し、石は金を収む、故に骨肉を爲す者は。根幹なり。解結に跡無し。金石土鹵なる者は。其の華實。以て解結を露す。土鹵は未だ形を成さず。金石は已に質を結ぶ。蓋し地中の物を爲す。水火なり。水火は会昜を有す。土鹵も亦た会昜を有す。昜土は火を得て燃ゆ、会土は水を得て親しむ、故に鹽は礇硼の鹵を消し、鹹自り結ぶ、硫は硝脳の鹵を礬し、膩自り結ぶ、金鐵は火を見て融け、玉石は火を見て碎ければ、則ち此れも亦た土と性を同じくするや觀る可し。堅輭の生は。均しく是れ生化すと雖も。艸木能く生ず、

金石能く結ぶ、

氣の結ぶ所は。則ち能く石質を爲す。亦た虚實を隔てず。故に或は以て天中に結ぶ、或は以て雷中に結ぶ、

(PB 159)

一*三五八三（復元）
一*三五八四（復元）
一*三五八五1復元
一*三五八五2復元
一*三五八五3復元
一*三五八五4復元
一*三五八五5復元
一*三五八五6復元
一*三五八五7復元
一*三五八五8復元
一*三五八五9復元
一*三五八五10復
一*三五八五11復
一*三五八五12復
一*三五八五13復
一*三五八五14復
一*三五八五15復
一*三五八五16復
一*三五八五17復

知らざる者は謂う。氣は沙土を擁し。天間に鑄冶すと。
或は。隕て石を爲す者は。乃ち天上の星なりと謂う。是れ皆な人工を以て天を窺うなり。
此の故に鍾乳浮石は、水の結なり、
玄精凝水は　鹹の結なり、
詎んぞ彼の土石を用いん。陶冶して而して後　結んで成らん。
楠榧は木自りして結ぶ、
牛黄狗寶　自ら病みて結ぶ、
今蜂蟻の琥珀に居る、
華葉の石中に生ず、
空青禹糧は水自り質を結べば。則ち結の跡　繹ぬ可きなり。
結の堅にして麁なる者は、乃ち石と爲す、石は麁密を分ちて、石と爲し玉と爲す、
結の輭にして精なる者は、乃ち金を爲す、金は堅輭を分ちて、金と爲し鐵と爲す、
銀朱胡粉は、金の火化に由て鹵を爲すなり、
磁器陶瓦は、土の人工に由て石を爲すなり、
焼灰は、木の火化に由て鹵を爲すなり、
乳香乾漆は、液の風化を經て塊を爲すなり、
石なる者は、麁體なり、
金なる者は、精體なり、
丹緑垢磁は、金にして麁なり、

一*三五八五18復　水晶寶石、瑪瑙臘石は、石にして精なり、
一*三五八五19復　滑石石脂は、鹵に幾し、堊赭、石灰、黒土は、土に幾し、
一*三五八五20復　土の。植は、黏にして堅なり、
一*三五八五21復　墳は、脆にして輭なり、
一*三五八五22復　石は、堅にして脆なり、
一*三五八五23復　金は、輭にして黏なり、
一*三五八五24復　至輭の極は、水銀に至る、
一*三五八五25復　至堅の極は、金剛に至る、
一*三五八五26復　地なる者は。塊然として中處す。土石は植に漸んで。未だ地體を離れず。
一*三五八五27復　故に其の形を塊然にして。未だ之を歧に開かず。石は已に定體を爲す。
一*三五八五28復　而して未だ定形を爲すを離れず。已に定形有らず。則ち他と寓似せざること能わず。
一*三五八五29復　故に石にして理形の變を極む。是を以て。石埋は、或は日月山川を爲す、
一*三五八五30復　或は艸木鳥獸を爲す、
一*三五八五31復　石形は、天工の萬品に肖る、又た人工の器械に狀す、
一*三五八五32復　是れ乃ち石の體なり。蓋し堅輭の動植。動は有意を爲す、
一*三五八五33復　植は無意を爲す、
一*三五八五34復　輭體は以て形を歧す、
一*三五八五35復　堅體は以て形を塊す、
一*三五八五36復　堅植は、金石土鹵なり、

(PB 160)

一*三五八五37復　輭植は、艸木藻樹なり、
一*三五八五38復　輭動は、鳥獣魚龍なり、
一*三五八五39復　堅動は、螺蛤龜蟹なり、
一*三五八五40復　輭生は肉を主とす、
一*三五八五41復　堅生は骨を主とす、
一*三五八五42復　螺蛤は最も塊然たり、變は則ち貝蝮等の形を爲す、
一*三五八五43復　龜蟹は亦た能く塊然たり、蟹鰕は則ち漸く其の形を開く、
一*三五八五44復　動植は。水陸に　各　居りて。而して堅動は水を親しむ、
一*三五八五45復　堅植は燥を親しむ、
一*三五八五46復　動の堅輭は、則ち骨肉迭に内外す、
一*三五八五47復　植の堅輭は、則ち枝幹相い有無す、而して
一*三五八五48復　水は堅植無きに非ず、珊瑚樹、石闌干、枝幹存して華葉無し、
一*三五八五49復　陸は堅動無きに非ず、石螺、石蛤、形體具して精神無し、
一*三五八五50復　堅植は、形を開きて柔植に漸めば、則ち珊瑚樹石闌干なり、
一*三五八五51復　堅動は、神を舍てて堅植に漸めば、則ち石螺石蛤なり、
一*三五八五52復　且つ聞くに。石植の華を開く者、
一*三五八五53復　大螺の山に在る者有れば、
一*三五八五54復　則ち水陸も亦た　各　相い雑す。然りと雖も。彼は之を常とし、此は之を變とす、
一*三五八五55復　條理の道。分るれば則ち粲然として類を隔つ、

*一三五八五56復
合すれば則ち混然として物を通ず、故に。

*一三五八五57復
一動一植は、陸に居し水に居す、物の分るる所なり、

*一三五八五58復
水陸動植は、或は漸み或は合す、物の合する所なり、故に

*一三五八五59復
品類を以て、而して其の擾擾を理す、

*一三五八五60復
漸合を以て、而して其の統を觀る、

*一三五八六
天地の具する所。萬物は茲に資る。

一三五八七
資れば則ち之を全にすること有るが如しと雖も、

一三五八八
剖けば則ち之を偏にする所有り、

一三五八九
相い反す。

一三五九〇
相い應ず。

一三五九一
相い之く。

一三五九二
相い漸む。

一三五九三
本生有り、

一三五九四
餘生有り、

一三五九五
天地を同くする有り、

一三五九六
天地を別にする有り、

*一三五九七
細かに神爲の妙を悉す。故に

一三五九八
動植は。其の形を塊歧にす。

一三五九九
其の物を横竪にす。

(PB 161)

一三六〇〇 其の體を虚實にす。
一三六〇一 其の氣を溫冷にす。
一三六〇二 本末は彼此を異にす。
一三六〇三 神本は相い長短す。
一三六〇四 緯偶に牝牡華實有り、
一三六〇五* 經繼に子母子苗有り、
一三六〇六 鳥獸、類を横竪に分つ、
一三六〇七 艸木、類を小大に分つ。
一三六〇八 小輭大堅、
一三六〇九 横重竪輕、
一三六一〇 鳥竪獸横、艸小木大、大分有りと雖も、
一三六一一* 錯雜還って相い結ぶ、故に
一三六一二 獸の類は、竪は人寓を分つ、
一三六一三 横は猫狗を分つ、
一三六一四 大は牛馬を分つ、
一三六一五 小は貂鼠を分つ、
一三六一六 鳥の類は、竪は鶴鷺を分つ、
一三六一七 横は鷹鸇を分つ、
一三六一八 大は鶏雉を分つ、

(I 522a)

一三六一九　小は鳩雀を分つ、
一三六二〇　陸生は文に富む、
一三六二一　水生は文に乏し、
一三六二二　文に富むを以て、而して鳥獣は猶お陸を以て水に漸むがごとし、
一三六二三　横竪の間。竪に人寓有り、
一三六二四　横に虎駄有り、
一三六二五　人に人犺の類有り、
一三六二六　寓に猿狨の屬有り、而して
一三六二七　此れ重に彼れ輕なり、
一三六二八　此れ頴に彼れ愚なり、
一三六二九　虎に虎豹の別有り、
一三六三〇　駄に牛馬の分有り、而して一重一輕なり。
一三六三一　輕き者は猛し、
一三六三二　重き者は力す、
一三六三三　人類なる者は、倮體穎性にして、而して技は智巧に在るなり、
一三六三四　寓類なる者は、被毛性黠にして、而して技は輕捷に在るなり、
一三六三五*　虎類なる者は、肢指に技有り、猛にして利觜尖爪有り、
一三六三六　駄類なる者は、蹄を以て爪に代う、強にして牙を含み角を戴く、
一三六三七　虎豹。豺狼。熊羆。貓犬。狐狸は。虎の類なり。

(PB 162)

一三六三八　牛馬。牦驢。犛駱。豬鹿。羊豕は。駄の類なり。
一三六三九　此れ之を大と爲す。而して亦た小類有り。
一三六四〇　其の大なる者を兎蹶の類と爲す。
一三六四一　貂鼬より。鼷鼠に至りて。漸く小なり。
一三六四二　鳥の竪なる者は。鸛鶴なり。鷺鷗と偶す。
一三六四三　鷹鶚烏梟は。猶お獸に虎類有るがごとし。
一三六四四　以て利觜尖爪を具す。
一三六四五　鷄雉鸞鳳は。猶お獸に駄類有るがごとし。
一三六四六　以て大觜長距を具す。
一三六四七　此れ之を大と爲す。而して亦た自から小類有り。
一三六四八　其の大なる者を、鳩鴿の類と爲す、
一三六四九　小なる者を、燕雀の屬と爲す、
一三六五〇　獸の水に漸む。
一三六五一　海人川童。
一三六五二　水豹臘虎。
一三六五三　海驢海牛。
一三六五四　水鼠海鼠。皆な陸形に從う。
一三六五五　鳥は最も水に漸むに於て富む。
一三六五六　長鷄短尾。矮脚にして蹼。稍や異類の如しと雖も。而も

一三六五七　近似する所有り。故に鵝は好んで蟲豸を食し。夜鳴　更に應ず。
一三六五八　鶩は能く鶏と相い群して。卵　鶏伏を假れば。
一三六五九　則ち其の性は鶏と遠からざるなり。是を以て。
一三六六〇　鳧雁の遠翔。亦た能く地に居す。
*一三六六一　漫畫の重身。鴛鴦の文彩。類は愈いよ鶏に近し。
*一三六六二　而して鸕鷀の鷺に近く。海烏の烏に近く。
一三六六三　海雀の雀に類する。漸水の間にも。亦た自から大小横竪の類有り。
一三六六四　浮を以てする者は。立を用いず。魚を食する者は。猛を用いず。
一三六六五　故に其の類は微なり。是を以て鷺鷸魚鷹の類は。陸形を以て水に居る。
*一三六六六　文に乏しきを以て、而して水生は惟だ魚龍有り、
一三六六七　魚は塊にして龍は歧す、
一三六六八　之を玩べば則ち鱗倮龍鱷に分る
一三六六九　鰭鬣を以って游ぶ者は、水の鳥と爲す、故に鱗倮を統べて、皆な魚なり、
一三六七〇　手腳を具して潛む者は、水の獸と爲す、故に龍鱷を統べて、皆な龍なり、
一三六七一　是に於てか。鳥獸は　各　鱗倮を有すなり。
*一三六七二　其の間は大小強弱と、微鱗巨鱗の異有りと雖も、
一三六七三　皆な其の體は竪にして、而して鱗を出でざるなり、
一三六七四　其の手腳を生ずるや、鼉と爲し、鯪鯉と爲す、皆な龍類なり、
*一三六七五−七六　倮は、則ち海鷂の扁、河豚の圓、

(PB 163)
(I 522b)

一三六七七　杜父の小、海鮖の大、
一三六七八　鰻鱺の長、鮫の痺瘤、
一三六七九　形狀は同じからずと雖も、而も其の體は横なり、而して
一三六八〇　倞に外ならず、而して其の手腳を生ずるや、
一三六八一　鱷と爲し、鰭、鮒と爲す、皆な鱷類なり、
一三六八二　鱗の　有無を以て之を分てば、鱗一、倞一なり、
一三六八三　手足の有無を以て之を分てば、魚一、龍一なり、
一三六八四　凡そ鱗なる者は卵生なり、
一三六八五　倞なる者は胎生なり、
一三六八六　鱗の鱗を没するは、猶お微鱗の玉屑の如くなる有り、
一三六八七　倞の皮を固くする、終に堅沙の痺瘤を爲す有り、
一三六八八*　而して鱗倞龍鱷は螺蛤龜蟹に併せて合して鱗甲の二種を爲すなり、
一三六八九　艸小木大、鳥竪、獸横、大分有りと雖も、錯雜は還って相い結ぶ、故に
一三六九〇　植の類は、竪に笸竹有り、
一三六九一　横に藤蔓有り、
一三六九二　木に喬矮有り、
一三六九三　艸に豊細有り、
一三六九四　陸中は植に富む、
一三六九五　水中は植に乏し、

(PB 164)

一三六九六　植に富むを以て、而して艸木は猶お陸を以て水に漸む、
一三六九七　動は能く類を隔つ、
一三六九八　植は能く類を雑う、
一三六九九　隔てば則ち混ぜず、
一三七〇〇　雑れば則ち相い淆す、是を以て。
一三七〇一　横竪大小。笣蔓卉樹を分つ。
一三七〇二　卉樹は、艸木の正なり、
一三七〇三　笣蔓は、艸木の變なり、
一三七〇四　笣なる者は、竪なり、
一三七〇五　蔓なる者は、横なり、
一三七〇六　卉なる者は、小なり、
一三七〇七　樹なる者は、大なり、而して
一三七〇八　笣蔓なる者は、艸木　各おの其の中に在り、
一三七〇九　卉樹なる者は、其の中　各おの艸木を有す、
一三七一〇　類の雑る所なり。是を以て。
一三七一一　竪は笣を爲す、
一三七一二　横は蔓を爲す、
一三七一三　笣なる者は、竪なり、直にして曲ること能わず、
一三七一四　蔓なる者は、横なり、依りて立つこと能わず、

(I 523a)

一三七一五　艸木の種子は、其の芽を生ずるに皆な下に向う、而して
一三七一六　笹類の種子は、其の芽を生ずるに皆な上に向う、
一三七一七　直圓の道を分資する有るに似る。
一三七一八　且つ柔生、皆な皮を以て肉を覆う　惟だ
一三七一九　笹は皮を以て笹を爲し、笹を脱して體を露す、
一三七二〇　木を爲せば、則ち虚は竹を爲す、實は櫻櫚と爲る、
一三七二一　艸を爲せば、則ち子を結んで牟麦稻粱と爲る
一三七二二　華を吐して茅芒菰蒲を爲す、
一三七二三　葱茖の葉を茎にする、木賊燈艸の茎を葉にする、
一三七二四　水仙燕子の葉を重ぬる。蘭と爲り。薑と爲り。菖蒲と爲り。萬年青と爲る。
一三七二五　皆な笹の變を極むるなり。而して
一三七二六　水に漸めば。則ち萱と爲り。荻と爲る。
一三七二七　皆な堅理を具して而して横文無し。蔓なる者は横植なり。
一三七二八　蔓にして艸、之を蔓と謂う、
一三七二九　蔓にして木、之を藤と謂う、
一三七三〇　同じく是れ豆と雖も、而も豇葛は藤蔓を分つ、
一三七三一　同じく是れ蔬と雖も、而も黄瓜　錦茘、葡萄　蘡薁、藤蔓を分つ、
一三七三二　同じく根を豊かにすと雖も而も菝葜仙糧。薯蕷萆薢は。藤蔓の殊なり。是に於て。
一三七三三　或いは相い有無し。或いは相い比類す。

(PB 165)

一三七三四　弱の變化を盡くすなり。而して水に漸めば。則ち蓴と爲り。菱と爲る。
一三七三五　世は生の藤蔓を分たず、概して之を蔓と言う、
一三七三六　笹の艸木を分たず、之を艸木に於て疑う、
一三七三七　樹は枝葉根幹の條理に正しく、
一三七三八　卉は枝葉根幹の條理に混ず、而して
一三七三九　木なる者は剛大なり、氷雪を亙りて久を保つ、
一三七四〇　艸なる者は柔小なり、春秋を逐いて相い換る、故に
一三七四一　華臺を以て幹を爲す。
一三七四二　鷄冠米囊の如き者有り。根を豊して肉を爲す。
一三七四三　萊菔蹲鴟の如き者有り。根を以って幹と爲る。
一三七四四　款冬芙蕖の如き者有り。枝を以って幹と爲る。
一三七四五　紫蕨　鳳尾の如き者有り。野蒜は子を葉頭に結ぶ。
一三七四六　蘘荷は華を茎外に發す。皆な樹の條理に異なるなり。
一三七四七　其の類の雜なる者は蠶豆　豇豆の。竪を爲し蔓を爲し。
一三七四八　蒴蒴接骨の。木を爲し艸を爲すが如き類なり。
一三七四九　枸杞　懸鉤の屬は、樹中に卉す、
一三七五〇　牡丹　棣棠の類は、卉中に樹す、
一三七五一　樹は水に在れば、則ち質を變じて火樹　海松を爲す、
一三七五二　卉は水に在れば、則ち形を變じて藻薀を爲す、

(I 523b)

一三七五三　水は動物に富む、故に動は變を水に於て極む、
一三七五四　陸は植物に富む、故に植は變を陸に於て極む、故に
一三七五五　海動は。一胎數萬なり。猶お植實のごときなり。是に於て。
一三七五六　手有り足無きこと。弾塗の如く。
一三七五七　左右を以て。腹背と爲ること。比目の如く。
一三七五八　身を倒にすること章魚の如し。
一三七五九　骨を外にすること龜の如し。
一三七六〇　文を没すること螺蚌の如し。
一三七六一　物に著くこと牡蛎の如し。
一三七六二　毬を爲すこと海膽の如し。
一三七六三　塊然たること水母の如し。
一三七六四　頑然たること海參の如し。
一三七六五　皆な陸變の有せざる所なり。
一三七六六　植に乏しきを以て、而して水生に惟だ藻樹有り、
一三七六七　藻は横にして樹は竪なり、
一三七六八　之を玩べば則ち笹蔓卉樹　分る、
一三七六九　笹蔓卉樹と金石土鹵と、望んで堅輭の二種を爲す、
一三七七〇　根を水底に託すと雖も。而も華葉の水上に在る者は。
一三七七一　陸漸の種にして。而して水植に非ず。

(PB 166)

一三七七二　全體を水に潛め。根を沙石に託する者にして。而して乃ち水植なり。
一三七七三　陸植は土に著きて生ず、
一三七七四　水植は石に著きて生ず、
一三七七五　藻は則ち柔輭なり、
一三七七六　樹は則ち堅剛なり、故に
一三七七七　藻は則ち水中の艸なり。
一三七七八　神馬は蔓の如し。菅藻は笹の如し。昆布は萵苣に類す。
*一三七七九　黒目は蔓菁の如し。海松は。卽ち松なり。
一三七八〇−八二　（欄外書き込みにつき削除。）
一三七八三　珊瑚樹の如き。石闌干の如き。屈曲錚錚。華葉を閉ず。
一三七八四　夫の蒙茸の海蘿　陟釐。鷄冠　鹿尾の如き。則ち餘生は苔を爲す。
一三七八五　苔は則ち水に專らにして、而して能く陸に至る、
一三七八六　菌は則ち陸に專らにして、而して能く水に至る、
一三七八七　水底石間、菌を生ず、髣髴として陸産の如し、
一三七八八　石面水際、苔を有す、依稀として水産に似る、
一三七八九　乏しと雖も。鱗介も亦た陸に漸む、
一三七九〇　鱗中の魚龍は、陸漸すれば、則ち蛇と爲り、蟒と爲り、蜥蜴と爲り、守宮と爲る、
一三七九一　倮中の魚龍は、陸漸すれば、則ち鯢と爲り、黿と爲り、蚯蚓と爲り、蚰蜒と爲る、
一三七九二　甲は則ち龜蟹、或いは山棲す、

(I 524a)

一三七九三

一三七九四　復元

介は則ち蝸牛夜啼、或いは陸處す、

*一三七九四1復元

藻苔も亦た陸に漸む、

松は女蘿　有り、

*一三七九四2復元

薔は垣衣　有り

*一三七九四3復元

乾處は乾にして苔を生ず、

*一三七九四4復元

溼處は溼にして苔を生ず、

一三七九五　復元

然り而して、陸は植の變を極む、

一三七九六　復元

水は動の變を極む、是を以て。

一三七九七　復元

水陸動植。類を分つ可し。而して種は自から無窮なり。

一三七九八　復元

生氣は此に於て盡きず。蓋し

*一三七九八1復元

動は蟲豸有り、

*一三七九八2復元

植は苔菌有り、

*一三七九八3復元

蟲は以て飛ぶ、

*一三七九八4復元

豸は以て行く、

*一三七九八5復元

苔は以て歧す、

*一三七九八6復元

菌は以て塊す、

*一三七九八7復元

物剖くれば則ち天地剖く。天地の多は。物類の滋き所なり。

*一三七九八8復元

禽獸は、我と天地を同じくす、而して體を異にし氣を類す、

*一三七九八9復元

艸木は、我と天地を同じくす、而して體を反し氣を反す、

(PB 167)

一*三七九八10復
一*三七九八11復
一*三七九八12復
一*三七九八13復
一*三七九八14復
一*三七九八15復
一*三七九八16復
一*三七九八17復
一*三七九八18復
一*三七九八19復
一*三七九八20復
一*三七九八21復
一*三七九八22復
一*三七九八23復
一*三七九八24復
一*三七九八25復
一*三七九八26復
一*三七九八27復
一三七九九

然り而して魚龍藻樹、禽獣艸木、天地反すと雖も。而も體類相い比す。
餘生の動植は。蟲豸なり、
苔菌なり、
蓋し天地の物を生じて。物又た天地を成す。大地並び立ちて。彼此同じからず。
餘生の動植は。多く　各の天地に生ず。天地は各なれば。則ち生も亦た異類なり。
故に蛭蟮蛙螢、泥壌に依る、
蚊蚋蜂蠅、艸莽に依る、
蠹は器物を天地とし。蟫は衣帛を天地とす。菌は朽質を天地とす。
黴は溼體を天地とし。毛髪は獣身を天地とす。羽翮は禽身を天地とす。
羽毛は、動の植なり、
華葉は、植の植なり、
蚘は、動の動なり、
蛣崛は、植の動なり、
故に瓜の天地無ければ、則ち蠬無し、
苗の天地無ければ、則ち蟊無し、
豈に其の物を天地とせずして生ずと曰うを得んや。
天地は愈よ多し、物類は愈よ滋し、
物類は愈よ滋し、天地は愈よ多し、
蓋し苔菌蟲豸は。餘生なり。餘生は水陸各有り。

一三八〇〇　同じく是れ蟲なりと雖も、一は則ち堅體なり、一は則ち輭體なり、

一三八〇一　同じく是れ豸なりと雖も、一は則ち腳を用う、一は則ち腳を去る

*一三八〇一1復元　飛ぶ者は、蟲の鳥なり、

*一三八〇一2復元　行く者は、蟲の獸なり、

*一三八〇一3復元　飛べば之を蟲と謂う、

*一三八〇一4復元　行けば之を豸と謂う、

*一三八〇一5復元　飛中の輭は、蚊蠅の一に屬す、蝶蛾の一に屬す、

*一三八〇一6復元　飛中の堅は、螢螯の一に類す、螽螻の一に類す

*一三八〇一7復元　蚊蠅の屬は、利觜毒尾、蚊と爲す、蚋と爲す、蜻蛉と爲す、赤卒と爲す、（赤卒　赤とんぼ）蠅と爲す、虻と爲す、蜂と爲す、果蠃と爲す、

*一三八〇一8復元　蝶蛾の屬、堅羽横羽、堅羽は則ち蝶なり、横羽は則ち蛾なり、

*一三八〇一9復元　蝶蛾は則ち其の品多種なり、而して人は總じて蝶蛾と名づく、而して

*一三八〇一10復元　好蜜の蛾、飲露の蟬、將に蛾を出でざらんと爲す、

*一三八〇一11復元　蠸、蚌、豉、叩頭、螢類、而して地膽、芫菁、獨角、螯の類なり、

*一三八〇一12復元　阜螽、莎雞、螽斯、蟷螂は一類にして、而して螻蛄、蟋蟀は、同屬なり、

*一三八〇一13復元　行中、有足は、陸に於て富む、

*一三八〇一14復元　無足は、水に於て富む、

*一三八〇一15復元　有足は、則ち蚤、蝨、蟫、蟻、蛛、蚣、蜒、蝬なり、

*一三八〇一16復元　水漸して、而して河豚の蜨の如き、平魚の蝨の如き、

*一三八〇一17復元

(PB 168)

*一三八〇一18復　望潮魚の如き、海蜈蚣の如き有り、
*一三八〇一19復　無足は、則ち水母、海鼠なり、
*一三八〇一20復　陸漸して、而して蚯蚓の如き、水蛭の如き、蛞蝓の如き、度古の如き有り、
*一三八〇一21復　蓋し夫れ、蠶。蜀。蚘蠖。蟪。子孑。水蠆。天螢。
*一三八〇一22復　或は艸を結んで懸る。或は葉を巻きて藏す。各自名を有すと雖も。
*一三八〇一23復　條理自り之を觀れば。羽蟲の未だ化せざる者にして。別に此の類有るに非ざるなり。
一三八〇二　同じく是れ苔なりと雖も、或いは枝葉を生じ、或いは衣黴を爲す、
一三八〇三　同じく是れ菌なりと雖も、或いは菌茸を爲し、或いは寓類を爲す、
一三八〇四　菌は、一幹にして蓋を載す、
一三八〇五　茸は、偏形にして物に依る、
*一三八〇六　寓は、麦蕈、馬勃、柔結す、
*一三八〇七　伏靈、豕槖、剛結す、
一三八〇八　陸は愈いよ植に富む、則ち
一三八〇九　水は愈いよ動に富む、
一三八〇九1移動　故に水に之く者は、牡蠣石蚶、植の如くにして而して神を含む、
一三八〇九2移動　陸に之く者は、石螺石蛤、動の如くにして而して神を舍つ、故に
一三八一〇　苔種は水に盛ん、
一三八一一　飛蟲は陸に富む、
一三八一二　陸植は、文にして多し、

(PB 169)

一三八一三　水植は　素にして寡し、
一三八一四　陸動は、　靈にして鮮し、
一三八一五　水動は、　癡にして繁し、
一三八一六　類有り分有り、　以て其の分を觀る、
一三八一七　相の相い合す、　以て其の合を觀る、

（一三八〇九1に戻す）

一三八一八

（一三八〇九2に戻す）

一三八一九　其の之く所を觀れば、　則ち鐘乳　水銀は、　水石相い之く、
一三八二〇−二一　橡樟　不灰は、　木石相い之く、
一三八二二　牡蛎　鹽麩は、　動植相い之く、
一三八二三　其の合する所を觀れば、　則ち　鷽鼠　蝙蝠は、　被毛垂肢、宛然として獸なり、
一三八二四　惟だ枝間に膜有りて、　而して肉翅を爲す、　翅頭に爪ありて、　能く物を鈎す、
一三八二五（復元）*　腦肭　海獺は、　共に毛に被われ、　前鰭を開けば則ち手と爲り、
一三八二六−二七　後脚を收めば則ち尾と爲る、
一三八二八　鰭を開き尾を立れば、　則ち手足と爲りて獸なり、
一三八二九　手脚を收めて游げば、　則ち鰭尾と爲りて魚なり、
一三八三〇　虛中に在る者は、　氣に恬するなり、
一三八三一　實中に在る者は、　質に止まるなり、　故に
一三八三二　物は潛んで質に在れば、　則ち能く生生を爲す、　蓋し地の類なり、
一三八三三

(I 524b)

(PB 170)

一三八三四　火は發して質を出れば、　則ち能く化化を爲す、　蓋し天の類なり、
一三八三五　火は之を氣中に傳えて益ます熾ん、
一三八三六　物は之を質中に潛めて愈いよ蕃る、
一三八三七　跡は反して理は一なり。是を以て。
一三八三八　鳥獸は、　氣物なり、
一三八三九　艸木は、　質物なり、
一三八四〇　水は質を結んで、　燥は生を煦し、　萬物は由りて以て生ず、
一三八四一　燥は居らず、　神は守らず、　萬物は由りて以て化す、　故を以て。
一三八四二　動は神を含みて、　天中に生化す、
一三八四三　植は質を持して、　地中に生化す、
一三八四四　雲雷雨雪は、　其の上に聚散す、
一三八四五　時に有し時に亡す、　母も無く子も無し、
一三八四六　艸木鳥獸は、　其の下に解結す、
一三八四七　先後體を換え、　生化相い繼ぐ、
一三八四八　氣氣は感應し。萬物は變化す。
一三八四九　大なる者は感應に跡無し、
一三八五〇　小なる者は感應に跡有り、　蓋し
一三八五一　小物は彼此偏立す。而して
一三八五二　其の彼此は。或いは物を同くす、

一三八五三　或いは物を異にす、
一三八五四　物を同くすれば、則ち雌雄牝牡の類なり、
一三八五五　物を異にすれば、則ち風雲動植の屬なり、
一三八五六　體を接し氣を交すれば。則ち同と異と無く。感應を有す。
一三八五七　感應すれば則ち變化有り。
一三八五八　若し彼を執りて以て此を觀、
一三八五九　此に反して以て彼に同じくすること能わずんば、
一三八六〇　則ち復た通ずること能わず、
一三八六一*　夫れ天地の間。通ぜざる者莫ければ。則ち感應せざる者無し。
一三八六二　我を執りて彼を察せず。
一三八六三　佗に病むなり。是を以て。
一三八六四　氣氣の相い交わる。感應此に成る。是を以て。
一三八六五　氣より質に出没すれば、則ち變幻を幽明の際に於て爲す、
一三八六六　質より氣に出没すれば、則ち妖怪を恍惚の中に於て爲す、
一三八六七　質を以て氣を動かせば、瓦釜は響を生ず、
一三八六八　氣を以て質を動かせば、雷は山嶽を震す、
一三八六九　氣を以て質を感ずれば、木葉は秋に萎む、
一三八七〇　質を以て氣に應ずれば、海珠は望に満つ、
一三八七一　其の性を變ずれば、則ち米は化して蚌と爲り、楠は變じて石と爲る、

(PB 171)

一三八七二　其の質を換えれば、則ち蠋は縮みて蛹と爲り、蠶は脱して蛾と爲る、
一三八七三　螺蛤は交わる無し、
一三八七四　金石は自から結ぶ、
一三八七五　分れて其の道を異にす、
一三八七六　合して其の居を同くす、
一三八七七　虚なる者は實ならず、
一三八七八　動なる者は靜ならず、是を以て。
一三八七九　此に有する者は彼に没するなり。是の故に。
一三八八〇　角を有する者は牙無し、
一三八八一　翼を有する者は手無し、
一三八八二　孰れか能く之に翼を予えて、以て其の手を奪わん、
一三八八三　之に角を予えて、以て其の牙を奪わん、
一三八八四　牙は卽ち角にして、
一三八八五　翼は卽ち手なるは、反の常なり。
一三八八六　此に全しと雖も。彼に必ず虧くるなり。
一三八八七　一に於て有せられて。而して二に於て反す。故に
一三八八八　鳥は羽を以て手に換え、而して羽は還って身を行るの用を爲す、
一三八八九　羽を以て身を行れば、則ち脚は把摑の用を爲す、是に於て
一三八九〇　彼は我の手を脚にす、

(I 525a)

一三八九一　我は彼の腳を手にす、
一三八九二　魚は鬣を以て羽に換え、而して鬣は還って身を行るの用を爲す、
一三八九三　鬣は以て身を行れば、則ち尾は還って守禦の用を爲す、是に於て。
一三八九四　魚は鳥の羽を鬣にす、
一三八九五　鳥の腳は魚の尾なり、
一三八九六　鳥は啄を以て主と爲れば、　屎を以て尿に換ゆ、
一三八九七　魚は飲を以て主と爲れば、則ち腮を以て鼻と爲す、
一三八九八　足ると雖も而も偏せざる所莫し、
一三八九九　偏すと雖も而も足らざる所莫し、故に
一三九〇〇　塊然たる金石、
一三九〇一　歧然たる鳥獸、
一三九〇二　彼の無き所、此に充つ、
一三九〇三　此の乏き所、彼に餘す、
一三九〇四　二に於て偏なりと雖も、而も一に於て全し。
一三九〇五　二に於て反すると雖も、而も一に於て足る有り、
一三九〇六　天地は大なりと雖も。動植は微なりと雖も。
一三九〇七　此に於て違うことを獲ざるなり。
一三九〇八　氣は聚まりて物を生ず。
一三九〇九　物は生じて氣を有す。

（則ち　を欠くか。）

(PB 172)

一三九一〇　氣は以て生を爲す、之を生と謂う、
一三九一一　物は以て體を有す、之を身と謂う
一三九一一*1復元　生は本神の氣を有す、
一三九一一*2復元　身は塊歧の別を有す、
一三九一一*3復元　動は有意を以て神と爲す、
一三九一一*4復元　植は無意を以て神と爲す、故に
一三九一一*5復元　植は冷止無意を以て生と爲す、
一三九一一*6復元　動は温動有意を以て生と爲す、
一三九一一*7復元　植は竪立堅剛を以て體と爲す、
一三九一一*8復元　動は横行柔輭を以て體と爲す、
一三九一一*9復元　動は、氣物なり、地を離れて横行す、牝牡は以て子を生ず、食息は以て身を養う、
一三九一一*10復　植は、質物なり、地に著きて竪立す、華實は以て種を生ず、水土は以て體を養う
一三九一二　金石は塊然として本氣に富む。
一三九一三　生化は攸久にして四紀を没す。
一三九一四　螺蛤より龜蟹に至る、
一三九一五　塊然より。歧然に漸む。
一三九一六　艸木は之を堅生に比すれば。則ち歧然として文を爲す。
一三九一七　根幹皮肉は。内外本末を具す。
一三九一八　堅植は塊然として、而して金は礦に生ず、

(PB 173)

一三九一九　玉は璞に抱るれば、則ち漸く内外に生ず、
一三九二〇　珊瑚樹　石闌干。終に枝幹を爲せば。則ち又た本末を生ず。
一三九二一　輭植は歧然として。而して菌は皮肉を没し　（て。は　て、であるべきか。）
一三九二二　寓は本末を没すれば、則ち塊歧は相い之く、
一三九二三　堅動は塊然として、而して龜蟹は則ち四紀を備う、
一三九二四　輭動は歧然として、而して海膽水母、將に其の紀を没せんとす、
一三九二五　鳥獸は已に神氣に富めば。本末内外。又た前後左右を多す。是を以て。
一三九二六　文章の條理は、輭生の歧に粲然たり、
一三九二七　堅生の塊に曖然たり、
一三九二八　本氣なる者は天成にして、物の本を爲す所以の氣なり、
一三九二九　神氣なる者は神爲にして、物の神を爲す所以の氣なり、
一三九三〇　堅生と我と類を爲すこと疏なり、
一三九三一　輭生と我と類を爲すこと親なり、
一三九三二　親しきの故に。氣の本神。質の皮肉は。
一三九三三　我と同じく生生を種子に於て繼ぐ。
一三九三四　同じく先後して體を換う。
一三九三五　本神皮肉同じと雖も。而れども亦た有餘不足の相い反する有り。故に
一三九三六　好惡知辨。彼は無意を以てす、
一三九三七　此は有意を以てす、

(I 525b)

(PB 174)

一三九三八
一三九三九

生生の種子は。彼に在りては、實と爲り苗と爲る、
此に在りては、精と爲り子と爲る

(PB 175)